

4/8 Wed.

第597回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.597 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

マリオ・ヴェンツァーゴ -p.5

MARIO VENZAGO

ヴァイオリン

シモーネ・ラムスマ -p.7

SIMONE LAMSMMA

コンサートマスター
Concertmaster

小森谷巧

TAKUMI KOMORIYA

バーバー

BARBER

ヴァイオリン協奏曲 作品14 [約25分] -p.10

Violin Concerto, op. 14

I. Allegro

II. Andante

III. Presto in moto perpetuo

[休憩]

[Intermission]

ブルックナー

BRUCKNER

交響曲 第3番 二短調〈ワーグナー〉

(第3稿/ノヴァーク版) [約57分] -p.12

Symphony No. 3 in D minor, "Wargner" (3rd version / Nowak edition)

I. Mehr langsam, Misterioso

II. Adagio, bewegt, quasi Andante

III. Ziemlich schnell

IV. Allegro

4/25 Sat.

第226回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.226 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

4/26 Sun.

第226回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.226 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Special Guest Conductor

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.6

KEN-ICHIRO KOBAYASHI

ヴァイオリン

福田廉之介 -p.7

RENNOSUKE FUKUDA

コンサートマスター

長原幸太

Concertmaster

KOTA NAGAHARA

サン＝サーンス

SAINT-SAËNS

ヴァイオリン協奏曲 第3番 口短調 作品61

[約29分] -p.14

Violin Concerto No. 3 in B minor, op. 61

I. Allegro non troppo

II. Andantino quasi allegretto

III. Molto moderato e maestoso – Allegro non troppo

[休憩]

[Intermission]

ベートーヴェン

BEETHOVEN

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉 [約47分] -p.15

Symphony No.3 in E flat major, op. 55 "Eroica"

I. Allegro con brio

II. Marcia funebre : Adagio assai

III. Scherzo : Allegro vivace

IV. Finale : Allegro molto

4/28 Tue.

第631回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.631 / Suntory Hall 19:00

4/29 Wed.
holiday

第119回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES No.119 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Special Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
チェロ
Cello
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ベートーヴェン
BEETHOVEN

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.6
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

成田達輝 -p.8
TATSUKI NARITA

遠藤真理 (読響ソロ・チェロ) -p.8
MARI ENDO (YNSO Solo Cello)

小林亜矢乃 -p.9
AYANO KOBAYASHI

小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

〈エグモント〉序曲 作品84 [約9分] -p.16
"Egmont" Overture, op. 84

三重協奏曲 八長調 作品56 [約36分] -p.17
Triple Concerto for Violin, Cello, and Piano in C major, op. 56
I. Allegro
II. Largo - III. Rondo alla polacca

交響曲 第7番 イ長調 作品92 [約36分] -p.18
Symphony No.7 in A major, op. 92
I. Poco sostenuto - Vivace
II. Allegretto
III. Presto
IV. Allegro con brio

指揮

マリオ・ヴェンツァーゴ

MARIO VENZAGO, Conductor

32年ぶりの来日 衝撃のブルックナー



©Alberto Venzago

ブルックナー演奏で高い評価を得ているスイスの名匠が読響初登場。1988年にN響へ客演して以来、32年ぶりの来日を果たし、日本で初めてブルックナーの交響曲を披露する。

チューリヒ生まれ。ウィーン国立音楽大学でハンス・スワロフスキーらに師事。ヴィンタートゥール・ムジークコレギウム、ハイデルベルク市立劇場、プレーメン・ドイツ室内フィル、グラーツ歌劇場、バーゼル響、バスク国立管、インディアナポリス響、イェーテボリ響の首席指揮者や音楽監督などを歴任。2010年から14年まで、ロイヤル・ノーザン・シンフォニアの首席指揮者を務め、現在はベルン響の首席指揮者兼芸術監督の任にある。ベルリン・フィル、ベルリン放送響、ボストン響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、フランス国立放送フィル、ロンドン・フィルなど世界各地の楽団に客演。オペラでは、ルツェルン音楽祭、ベルリン・コーミッシェ・オーパーなどで活躍している。

ベルク、ノーノ、グバイドゥーリナら近現代音楽を得意とし、数々の録音をリリース。また、CPOレーベルからリリースされた、五つの楽団を振り分けたブルックナーの交響曲全集は、国際的に高い評価を受け、「史上最も刺激的で、そして示唆に富んだ、斬新なブルックナー」と評されるなど、日本でも話題を呼んだ。

4/8
定期

Maestro

4/25

土曜マチネー

4/26

日曜マチネー

4/28

名曲

4/29

みなとみらい

Maestro

指揮

小林研一郎
(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

**傘寿を迎えるマエストロ
渾身のベートーヴェン**

©読響

今年4月9日に80歳を迎え、ますます円熟味を深める“炎のマエストロ”。ベートーヴェンの生誕250周年を祝い、二つのプログラムで熟達のタクトを披露する。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年、第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニング・コンサートの指揮者に東洋人として初めて起用され、〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏して絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の“星付中十字勲章”、ハンガリー文化大使の称号を授与された。11年、文化庁長官表彰。13年、旭日中綬章を受章。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授の任にあるほか、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督、ロームミュージックファンデーションの評議員を務めている。

録音では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が好評を博す。



©Otto van den Toorn

ヴァイオリン

シモーネ・ラムスマ

SIMONE LAMSMA, Violin

ニューヨーク・フィルの音楽監督ズヴェーデンから「世界をリードするヴァイオリニスト」と絶賛されているオランダの名花。メニューイン音楽院と英国王立音楽院で学び、インディアナポリス国際コンクールなど多くのコンクールで入賞。これまでに、マリナー、ヤノフスキ、ピエロフラーヴェク、ガーディナー、ネゼ=セガン、ナガノ、V.ユロフスキらの指揮で、ロイヤル・コンサートヘボウ管、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、クリーヴランド管、フランクフルト放送響、ロンドン・フィル、フランス国立管などと共演。ウィグモア・ホール、カーネギーホールなど、世界の著名ホールでリサイタルを開催。チャレンジ・クラシックスからリリースされたCDも高い評価を得ている。使用楽器は、1718年製のストラディヴァリウス「ムイナルスキ」。

柔軟な発想力とひらめきを持つ新鋭。1999年岡山県生まれ。2013年クロスター・シェンター国際コンクール・ジュニア部門優勝。併せてヴィルトゥオーゾ賞なども受賞。14年メニューイン国際コンクール・ジュニア部門優勝。シオンの音楽学校をわずか1年で首席卒業し、16年からローザンヌ高等音楽院で学んでいる。17年、ハイフェッツ国際コンクール第3位、ヴァルセシア・ムジカ国際コンクール優勝。18年、ハノーファー国際コンクール第4位。これまでD.ユロフスキ、G.ゲレーロ、山田和樹らの指揮で、クリーヴランド管、ロンドン・フィル、モスクワ・フィル、ハノーファー北ドイツ放送フィル、大阪フィルなどと共演。17年、ギトリス賞を受賞。今年1月、日本コロムビアから初のソロCDをリリース。今回が読響初登場。



ヴァイオリン

福田廉之介

RENNOSUKE FUKUDA, Violin

4/8

定期

Artist

4/25

土曜マチネー

4/26

日曜マチネー

Artist

4/28
名曲4/29
みなとみらい

Artist



©Marco Borggreve

ヴァイオリン

成田達輝

TATSUKI NARITA, Violin

卓越した技巧を持ち、熱いパッションを漲らせる若き実力派。1992年生まれ。パリ国立高等音楽院で学ぶ。2010年のロン=ティボー国際コンクール、12年のエリザベト王妃国際コンクールとともに第2位に輝き、注目を集めた。これまでにクリヴィヌ、アルトリヒテル、インキネン、小林研一郎、尾高忠明、下野竜也、山田和樹らの指揮で、リュッセル・フィル、ルクセンブルク・フィル、ブラハ響、N響、東響、東フィルと共演している。ホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞など受賞多数。一柳慧、酒井健治らの作品を初演するなど、現代作品にも意欲的に取り組んでいる。使用楽器は、宗次コレクションから貸与された1711年製のストラディヴァリウス「タルティーニ」。読響とは12年以来、二度目の共演。

豊かな歌心と温かな音色で魅了する日本が誇る名手。2017年4月から読響ソロ・チェロ奏者を務めている。東京芸術大学を卒業後、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学修士課程を修了。日本音楽コンクール第1位、「ブラハの春」国際コンクール第3位など受賞多数。齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。これまでにG. ボッセ、J=P. ヴァレーズ、モルロー、小林研一郎、山田和樹らの指揮でウィーン室内管、ブラハ響、都響などと共演。ドイツ・キームガウ春の音楽祭、神戸国際芸術祭などで室内楽奏者としても国際的に活躍している。録音はソロ・アルバムのほか、小林研一郎指揮、読響との「ドヴォルザーク：チェロ協奏曲」などをエイベックス・クラシックスからリリース。20年3月までNHK-FM「きらクラ!」のパーソナリティを務めた。



©Yuji Hori

チェロ

遠藤真理 (読響ソロ・チェロ)MARI ENDO (YNSO Solo Cello),
Cello

©Hiromi Uchida

ピアノ

小林亜矢乃

AYANO KOBAYASHI, Piano

優美な音色で魅了するピアノの名花。桐朋学園「子供のための音楽教室」を経て、東京音楽大学ピアノ演奏家コースに特待生で入学、首席で卒業。ケルン音楽院を首席で卒業。日本音楽コンクール入選、カラブリア国際コンクール第2位、エンニオ・ポリリーノ国際コンクール第3位など受賞多数。これまでにネーデルラント・フィル、チェコ・フィル、ハンガリー国立フィル、東響、日本フィル、名古屋フィル、大阪フィルなど国内外の楽団と共演している。2019年5月にはブダペストにて日本・ハンガリー国交樹立150周年記念コンサートでブダペスト響と共演し、好評を博した。ドイツでのリサイタルや、スペインのセビリア・スプリングフェスティバルに招かれるなど国際的にも活躍。

4/28
名曲4/29
みなとみらい

Artist

バーバー

ヴァイオリン協奏曲 作品14

20世紀アメリカの作曲家サミュエル・バーバー（1910～81）は、幼い頃から音楽的才能を発揮し、14歳でフィラデルフィアのカーティス音楽院に入学した。卒業作品として書いた序曲〈悪口学校〉（1931）が、1933年にフィラデルフィア管弦楽団によって初演されて世に認められると、1935年に奨学金を得てローマに留学する。モダニズムや前衛音楽と距離を取りつつ、民謡や伝統的な素材に頼らない親しみやすい旋律と和声で書かれ、叙情的な味わいや美しさ、洗練されたオーケストレーションを特徴とする数々の作品を残した。バーバーの名声を最初に高めたのは、ローマ時代に作曲された交響曲第1番（1936）で、トスカニーニやワルターがこぞって取り上げた。同じくローマで書かれた弦楽四重奏曲口短調（1936）は、翌年に第2楽章「モルト・アダージョ」が弦楽合奏用に編曲されて〈弦楽のためのアダージョ〉として発表された。彼の作品のなかで最も有名なこの曲は、後にジョン・F・ケネディ大統領の葬儀で追悼曲として用いられ、また、映画『プラトーン』（1986年公開）でも使用された。

ヴァイオリン協奏曲は、フィラデルフィア在住の実業家で、慈善活動にも力を入れていたサミュエル・フェルズの委嘱で、若手ヴァイオリン奏者ブリゼッリのために作曲された。フェルズの勧めでスイスに渡ったバーバーは、1939年夏に第1、2楽章を書き上げた。10月の締切りに間に合わせるため終楽章に取りかかろうとしたところ、第二次世界大戦勃発直前でヨーロッパ滞在が厳しくなり、パリから船で9月初旬にアメリカに帰国した。まずは二つの楽章をブリゼッリに見せると好意的な反応を見せたが、終楽章を送ってから話が拗れた。それぞれの主張は異なる。

ブリゼッリは、目まぐるしく動き続ける技巧的な音楽は、フィナーレにふさわしくないの、この部分を中間部としてもっと壮大な音楽に書き直すように提案したが、バーバーに拒否された。バーバーによれば、ブリゼッリに演奏不可能と受け取りを拒否されたが、友人のカーティス音楽院のヴァイオリニストは演奏可能としているので書き直しはしないと伝えた。2010年に発表された研究論文によると、当時の手紙等から二人の主張に、ブリゼッリのヴァイオリン教師の思惑も加わり、余計に拗れたようだ。結局、バーバーは作曲料の半分を返還し、友人のヴァイオリニス

トの協力のもと試演会を行い、演奏可能であることを証明した。翌年1月に予定されていたブリゼッリによる初演は流れてしまったが、1941年2月7日にアメリカの名ヴァイオリン奏者アルバート・スポールディングの独奏、ユージン・オーマンディ指揮のフィラデルフィア管弦楽団によって初演され、成功を収めた。数日後にはニューヨークのカーネギーホールで再演されるなど、反響は予想外に大きかった。なお、バーバーは、1948年に速度標語をはじめ改訂を行い、それが決定稿となった。オーケストラは2管編成、打楽器の種類は少ないがピアノが入る。

第1楽章 アレグロ、ト長調、4/4拍子 序奏は持たず、独奏ヴァイオリンがノスタルジックで甘美な第1主題を奏でる。続いてクラリネットのリズミカルな動きで始まる第2主題が示される。二つの主題が展開され、堂々とした再現部の最後に小規模なカデンツァが置かれ、コーダで二つの主題が静かに回想される。

第2楽章 アンダンテ、ホ長調、6/4拍子 オーボエの穏やかな旋律で静かに開始され、チェロ、クラリネット、ヴァイオリン、ホルンに受け継がれる。独奏ヴァイオリンが現れてラプソディックな旋律を歌い上げて短調に転じ、中間部はトランペットの同音反復を背景に進み、やがて自由に揺れ動く。独奏ヴァイオリンにより冒頭の旋律が再現され、ロマンティックに壮大に広がる。

第3楽章 プレスト・イン・モート・ペルペトゥオ [無窮動のプレスト]、イ短調、4/4拍子 ティンパニに導かれて独奏ヴァイオリンが3連符のパスセージで絶え間なく動き、駆け抜ける。ヴァイオリンの鮮やかな技巧が存分に発揮される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1939～40年／初演：1941年2月7日、フィラデルフィア／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器（小太鼓）、ピアノ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブルックナー

交響曲 第3番 二短調 〈ワーグナー〉(第3稿/ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー(1824~96)は、1873年の9月に第2番と作曲中の第3番の二つの交響曲を携えて、パイロイトのワーグナーのもとを訪ねた。当時、祝祭劇場の建設で多忙だったワーグナーは、楽譜に目を通すことに乗り気でなかったが、第3番冒頭のトランペット独奏の旋律に興味をもち、ブルックナーが作品の献呈を申し出ると快諾の返事をくれた。同年の12月31日に全曲完成後、専門の筆写譜家によって清書された総譜は、1874年5月9日付でワーグナーに献呈された。

いわばワーグナーお墨付きといえる作品であるが、1874年と翌年にパート譜を準備してウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に提出したところ、2回とも演奏を拒否された。そのためこの第1稿は、作曲家の生前に初演されることも、楽譜が出版されることもなかった。ブルックナーは、大半の交響曲で改訂を重ねているが、第3番も例外ではなく、1877年に全体的大幅な短縮を行い、楽想やオーケストレーションを変更するなどして第2稿を完成させた。どうにか同年末にウィーンの楽友協会の演奏会で初演されることになったが、作曲家の良き理解者だった指揮者ヘルベックが急逝したため、ブルックナー自身が指揮した。だが、練習不足だったため、音楽評論家ハンスリックを中心とした反対派の野次にさらされた(聴衆のなかに若き日のマーラーもいた)。その惨憺たる結果にブルックナーは相当落ち込んだが、幸いなことに出版社から打診があり、翌年に総譜とパート譜が出版された。その後、ウィーンの楽壇におけるブルックナーの地位は少しずつ高まっていき、1881年の交響曲第7番の輝かしい成功などによって名声は確立され、第3番の再演が待たれた。そして周囲の勧めで再改訂を行い(マーラーは反対したようだ)、1889年に第3稿が完成した。ここでは第2稿で追加したスケルツォ楽章(第3楽章)のコーダが削除され、終楽章の再現部が大幅に縮小された。

本日は、その第3稿による演奏である。楽曲全体はすっきり整理され、凝縮された密度の濃い作品となっている。第1稿にはワーグナーの作品(〈トリストアンとイゾルデ〉〈フルキューレ〉〈タンホイザー〉など)からの引用も含まれたが、多くは改訂を重ねるなかで削除された。また、この交響曲から本格的に現れるブルックナー・リズム(2+3、3+2)が、改訂のたびに強調されていった。

第1楽章 より遅く、神秘的に、二短調、2/2拍子 弦楽器の弱音の響きから、トランペット独奏が浮かび上がる。堂々とした第1主題は、ブルックナー休止(総休止)をはさみながら高まり、へ長調の穏やかな第2主題は、ブルックナー・リズムによる。管楽器のコラール風の第3主題は、途中でトランペットが新しい動機を加える。再現部ではブルックナー・リズムが強調され、コーダはティンパニが轟く。

第2楽章 アダージョ、動きをもって、クワジ・アンダンテ、変ホ長調、4/4拍子 改訂のたびに速度標語が微妙に変化し、楽章規模も縮小された。穏やかな第1主題がヴァイオリンで歌われ、ヴィオラが憧れに満ちた第2主題を奏でる。静かで神秘的な楽想を経て、第2主題がヴァイオリンに現れる。第1主題が木管楽器で再現され、力強いファンファーレが輝き、祈りのような音楽で終結する。

第3楽章 かなり速く、二短調、3/4拍子 弦楽器の旋回する音型とピッツィカートを組み合わせた開始から、全楽器による力強い主題が現れる。歌謡的な中間部をはさみ繰り返される。トリオ(イ長調)は明るく、素朴な旋律が歌われる。

第4楽章 アレグロ、二短調、2/2拍子 力強く突き進む第1主題、緩やかなテンポで表情豊かな第2主題、管楽器が高らかに響く第3主題が提示される。再現部は、第3稿で第1主題と第3主題が削除されたため、縮小された第2主題から始まる。最後は、第1楽章の冒頭主題が金管楽器で輝かしく再現されて力強く結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1872~73年(第1稿)、1877年(第2稿)、1888~89年(第3稿)／初演：1877年12月16日、ウィーン(第2稿)、1890年12月21日、ウィーン(第3稿)／演奏時間：約57分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

4/25

土曜マチネー

4/26

日曜マチネー

Program Notes

サン＝サーンス

ヴァイオリン協奏曲 第3番 口短調 作品61

1870年代から80年代にかけて、カミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)は創作期の盛りを迎えていた。当時、作曲家は必ずしも恵まれた私生活を送っていたわけではない。1875年に40歳で結婚。21歳年下の妻と生活を始めるが、歯車が噛み合わない。夫妻は二人の息子をもうけたが、事故と病気で相次いで子供たちを失う。夫は妻に当たり散らす。妻は堪えきれず、81年に失踪した。

こうした状況にあって創作の筆がはかどるのは、作曲家がその私生活を音楽の現場に持ち込まないタイプだったからか、はたまた、逆境をバネに仕事に打ち込むタイプだったからか。いずれにせよこの時期、サン＝サーンスはピアノ協奏曲第4番、歌劇〈サムソンとデリラ〉、ヴァイオリン・ソナタ第1番、交響曲第3番〈オルガン付き〉といった傑作を量産していた。ヴァイオリン協奏曲第3番も、その列に連なる名曲のひとつだ。完成は1880年。翌年1月、被献呈者のヴァイオリニスト、サラサーテを独奏者に迎え、パリで初演された。

第1楽章冒頭、布をジグザグと縫い進めるような音型と、長短短リズムのモチーフとのユニットが、独奏ヴァイオリンによって示される。以後、それらはそれぞれ引き伸ばされたり縮められたり、ときには融合させられたりしながら、独奏と管弦楽との間を行ったり来たりする。

第2楽章はバルカロール(舟歌)風。波のさざめくような伴奏形が特徴的だ。独奏と管弦楽とが音型をやりとりしながら音楽を前に進めていくが、その様子は水辺に打ち寄せては返す小波のよう。第1楽章とは対照的に楽想は穏やか。

終楽章はヴァイオリンの技巧的な独奏で始まる。続く主部は速い3拍子系の舞曲ジグ。静かな部分を挟んで序奏を回想したのち、ジグを再現する。やがて金管楽器群による讚美歌風の楽句を呼び水に、華々しく終結へと向かう。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1880年／初演：1881年1月2日、私的演奏会にて、パリ／演奏時間：約29分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ベートーヴェン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)は当初、交響曲第3番に革命戦争の英雄ナポレオン・ボナパルトへの献辞を添えていた。共和主義者だった作曲家は、ナポレオンが皇帝に即位した(1804年5月18日)ことを知り、総譜の扉に書いたその献辞をかき消す(同8月)。ただ、ベートーヴェンが8月26日付で出版社に送った手紙には、「交響曲には本当はボナパルトという題がつけられている」との記述が残る。特定の人物を想定しているが、音楽自体がナポレオンの具体的な容姿や生き方を描写しているわけではない。

何度かの非公開演奏ののち、1805年に公開初演を迎えた。その様子を当時の批評が伝えている。「(第3交響曲には)どぎつさや奇抜さが余りにもしばしば見られ、そのことによって見通しが極めて難しくなり、統一がほとんど失われている」(『一般音楽新聞』1805年2月13日号)

散々な書かれようだが、そこからは逆に、ベートーヴェンがこの作品で従来の交響曲の概念をひっくり返してしまったことが分かる。演奏会では「大変な喝采を受けた」という記録も残されており、耳新しさを喜んだ聴衆もいた。

第1楽章、延々と続くヘミオラ(たとえば8分音符6つを4分音符3つとみなす拍節変化)には演奏者ですら参ったとの報告が残る。作曲家の弟子リースは、再現部直前、弦楽に主題が回帰する数小節前にホルンがフライングする場面を、ベートーヴェンの「意地悪」として回想している。**第2楽章**は短短短長のリズム(タタター)が耳を引く葬送行進曲。中間部では伴奏を舞曲ジグ風の長短短リズムに衣替えさせて推進力を保つ。**第3楽章**のスケルツォでは名前の通り「冗談」めいた楽想が続く。速過ぎる3拍子が聴き手の拍節感をかき乱す。変奏曲仕立ての**第4楽章**も興味深い構成。低音のテーマだけを示したあと、さまざまな横顔の変奏を続ける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1803～04年、オーバーテュープリングおよびウィーン／初演：1805年4月7日、アン・デア・ウィーン劇場、ウィーン／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部

4/25

土曜マチネー

4/26

日曜マチネー

Program Notes

4/28
名曲4/29
みなとみらい

Program Notes

ベートーヴェン 〈エグモント〉序曲 作品84

1809年5月、ウィーンはナポレオン率いるフランス軍によって占領される。10月にオーストリアとフランスの間で講和条約が結ばれると、ウィーンの街に少しずつ日常が戻ってきた。宮廷劇場支配人のヨーゼフ・ハルトルは戦争のため休演していた劇場を立て直すべく、1810年春にゲーテの『エグモント』とシラーの『ヴィルヘルム・テル』の上演を企画する。その際、劇付随音楽の作曲者として、『エグモント』にはルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)が選ばれた。シラーに傾倒していたベートーヴェンは当初『ヴィルヘルム・テル』のほうを望んでいたというが、『エグモント』の作品内容への共感もあってか、意欲的に作曲に取り組み、序曲、そしてヒロインであるクレール・ヒエンのための二つの歌曲など、全10曲を書きあげた。つまり、劇とは言っても、ヒロイン役にはセリフのほかに歌も用意されていたことになる。

5月24日、ブルク劇場での初演までに作曲は間に合わず、6月15日になってベートーヴェンの音楽がすべてそろった状態で上演された。

ゲーテの『エグモント』は、実在の人物であるエグモント伯爵ラモラルをモデルにした戯曲。スペイン支配下のオランダで、圧政を批判し、弾圧よりも市民の自由を訴えたエグモント伯爵は、反逆罪で捕えられて死刑を宣告される。恋人クレール・ヒエンによる救出の努力もむなしく、伯爵は「私は自由のために死ぬ」と宣言し、処刑場へと歩む。

曲は重々しく引きずるような強奏で始まり、エグモントの悲運を示唆する。続いて緊迫感あふれる闘争的な楽想がくりひろげられ、エグモントの強固な信念を思わせる。張りつめたヴァイオリンの高音が音楽の流れを断ち切り、輝かしいコーダが英雄の高邁な精神を称えてオランダの独立を予感させる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1809~10年／初演：1810年6月15日、ブルク劇場、ウィーン／演奏時間：約9分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン 三重協奏曲 八長調 作品56

ベートーヴェンが作曲した協奏曲のなかでもひととき異彩を放っているのが、この三重協奏曲。ピアノ、ヴァイオリン、チェロの3人ものソリストを要する珍しい編成を持つ。作曲の経緯は明らかではない。18世紀後半までパリでは協奏交響曲(サンフォニー・コンセルタント)の名で複数の独奏楽器による協奏曲が人気を獲得していた。1802年、パリで活躍していた旧友のアントン・ライヒャがウィーンにやってきた際に、ベートーヴェンは彼との会話から複数楽器による協奏曲のアイデアを思いついたのかもしれない。もっとも、この三重協奏曲は3人のソリストが妙技を競い合うというよりは、ピアノ・トリオとオーケストラのための協奏曲とみなしたほうが納得がゆく。トリオのなかでもチェロがリーダー格を務めているのが特徴的だ。

ベートーヴェンの伝記作者シンドラーによれば、ピアノにはベートーヴェンのパトロンであり弟子でもあったルドルフ大公、ヴァイオリンにはカール・アウグスト・ザイドラー、チェロには当代一流の名手アントン・クラフトが想定されていたというが、この記述は信憑性に乏しい。作曲は交響曲第3番〈英雄〉と同時期。1804年に〈英雄〉とともにパトロンのロプコヴィッツ邸で試演されるも、出版の遅れなどもあり、1808年に公開初演された。

第1楽章 アレグロ 雄大で力強い提示部に続いて、チェロ、ヴァイオリン、ピアノの順で独奏楽器が登場し、風格のある楽想がくりひろげられる。

第2楽章 ラルゴ わずか53小節のみの間奏曲的な楽章。独奏チェロの伸びやかで叙情的な主題に弦楽合奏が静かに寄り添う。切れ目なく第3楽章へと続く。

第3楽章 ロンド・アラ・ポラッカ ポラッカとはポロネーズのこと。独奏チェロによるロンド主題で始まり、入念で高揚感あふれるクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1804年／初演：1808年5月、アウガルテン、ウィーン／演奏時間：約36分
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ、独奏ピアノ

4/28
名曲4/29
みなとみらい

Program Notes

4/28
名曲

4/29
みなとみらい

Program Notes

ベートーヴェン

交響曲 第7番 イ長調 作品92

〈エグモント〉上演の翌年となる1811年、ベートーヴェンは夏を温泉保養地で過ごした後、ウィーンに戻って本格的に交響曲第7番の作曲に取り組む。交響曲としては、第5番〈運命〉と第6番〈田園〉を1808年に完成してから3年のブランクを経ての新作となった。1812年の4月頃に曲を書きあげたものの、ここから初演に至る道のりは平坦ではなかった。1813年にルドルフ大公邸で試演されるも、公開初演の計画は戦争によるウィーン経済の混乱もあって頓挫してしまう。

そこにメトロノームの考案者として知られるメルツェルから、ウェリントンの勝利（イギリス軍がフランス軍に勝利を収めた）を祝う時事的な新作を書いてはどうかという提案が届く。ベートーヴェンはこれを受諾して〈ウェリントンの勝利〉を作曲した。時流に乗ったこの作品と合わせて、同年12月に交響曲第7番の初演がようやく実現する。商才に富んだメルツェルの狙い通り〈ウェリントンの勝利〉はウィーンの音楽界に旋風を巻き起こし、公演は異例の大成功を収めた。話題の主役となったのは〈ウェリントンの勝利〉だが、交響曲第7番も好評を博し、特に第2楽章はアンコールが求められた。

第1楽章 ポコ・ソステヌート〜ヴィヴァーチェ 堂々とした大規模な序奏で開始され、軽快な付点リズムの反復が躍動感あふれる主部を導く。

第2楽章 アレグレット 痛切な主題は粛々と歩む様子を連想させる。主題を変奏させながら次第に高揚し、悲劇的な頂点を築く。

第3楽章 プレスト 鋭く弾むような急速なスケルツォと田園風のひなびたトリオが交代する。

第4楽章 アレグロ・コン・プリオ 叩きつけるようなリズムを執拗に^{しつよう}反復しながら、陶酔的な興奮と熱狂を呼び起こす。

（飯尾洋一 音楽ライター）

作曲：1811～12年／初演：1813年12月8日、ウィーン大学講堂／演奏時間：約36分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部